

サイエントロジー
その歴史的な
形態上の枠組み



ダリオ・サバトウッチ
宗教史教授
ローマ大学
イタリア、ローマ

1983年12月12日

サイエントロジー
その歴史的な
形態上の枠組み

サイエントロジー
その歴史的な
形態上の枠組み

目次

I.	はじめに	1
II.	教義内容	2
III.	儀式的な実践	4
IV.	最終的考慮	7

サイエントロジー その歴史的な 形態上の枠組み



ダリオ・サバトウッチ
宗教史教授
ローマ大学
イタリア、ローマ

1983年12月12日

I. はじめに

サイエントロジーは、教祖的な創設者であるL. ロン ハバードの教えから生まれた「預言的」宗教で、彼は仏教における仏陀ゴータマや、キリスト教におけるキリスト、イスラム教におけるマホメット（今日の三大宗教）と同様の位置に置かれます。キリストとマホメットとは異なり、ハバード氏は自分が神である、または神の啓示を受けたとは主張しませんでした。ゴータマのように、ハバード氏は自分は精神的啓発、救済、そして自由への道を発見したひとりの人間であると主張しました。

L. ロン ハバードは成功を取めた著作『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』を1950年に出版しました。この本は社会人類学的、歴史のおよび哲学的宗教論議によって裏付けられた公理を用いて、外部世界（混沌）における挫折感に立ち向かう「自己形成の成就」（あるいは「静の生命」の成就）を保証します。この本の成功により、現在、ダイアネティックスを包含するサイエントロジー宗教が生まれたことは事実です。「サイエントロジー」という名が由来する科学的な根拠に惑わされてはいけません。それは現代の宗教であり、現代的である（または現代人に合う）ということから、科学的と称しています。これに関して、宗教としての一貫性に何の疑いもないイスラム教領域のバハイズムおよびキリスト教領域でのクリスチャン・サイエンスにおける似たような例をここに2件挙げます。

バハイズムは前世紀に始まり、その名は、すでにイスラム系ペルシャにおける宗教運動、バビズムの信奉者であった創設者の称号バハウラー（「神の光輝」）に由来しています。バハイズムの中でも最も重要な救済論的命題は、科学と宗教の調和です。

クリスチャン・サイエンスはアメリカの預言者メアリー・ベーカー・エディーによって前世紀後半頃に創設されました。この宗教は心身医学から始まりました。「精神的な健康」に関するハバード氏の人気著作と同様、クリスチャン・サイエンスもまた1875年に出版されたエディーによる人気著作『科学と健康』から始まりました。「健康」は、これら預言者かつ著者にとっては「救済」と同じ意味を持ち、これにより多かれ少なかれラテン語の概念である「サルス」を再び始めることになります。

初のサイエントロジー宗教団体は、サイエントロジー教会カリフォルニアという名で1954年に設立されました。キリスト教会の制度を用いて、この宗教は自らを組織し、完成させました。サイエントロジー教会は英語圏世界におけるさまざまな都市（カナダ、オーストラリア、南アフリカ、イギリス、アメリカ合衆国）に、またフランス、ドイツ、デンマーク、オランダ、イタリア、スウェーデンにまで広まっています。その他のヨーロッパ諸国（ベルギー、オーストリア、アイルランド）およびヨーロッパ以外の諸国（日本、韓国、インド、イスラエル、メキシコ）でもサイエントロジーのミッションや教会が存在しています。

II. 教義内容

1. キリスト教文化においては、基本的な宗教的価値観に関する教義すべてが神学と称されており、これは何事も神の知識と意思に関連することを根拠にします。この点において、サイエントロジーの用語と概念は「神学」を代用するものです。神の学問の代わりに、ここには知識の学問があります。しかし両者ともに、知識の真の目的は絶対者であり、事実、この「知識」が絶対者なのです。学習と適用を必要とするにもかかわらず、サイエントロジーは精神的で物質宇宙の経験的知識を超越しており、物質宇宙に介入することも可能とされています。

サイエントロジーの教義内容は、自己の内面を見つめることから生まれており、これはまたキリスト教における「自己の内面に存在する神」の研究にも見られる神秘主義的反主流の典型でもあります。カリフォルニアでの組織編制の際に、サイエントロジー教会が表明したその命題は、「神の存在についての最高の証しは、人が自己の内面に見出す神である」でした。しかし、サイエントロジーの明確かつ絶対的な内面探求は、ウーパニシャド（インドのベータ宗教神学を解説する哲学体系）における瞑想から始まる方法に依っています。

ウーパニシャドは次のように形成されています。宇宙の本質であるブラフマーはそれ自体を人間の本質であるアトマンと同一視し、人は自分自身のアトマンを認識することによって、神を頼むことなく宇宙と接触することができる。そして神は多神教におけるように、さまざまな形態や側面を持つ宇宙そのものであるというものです。サイエントロジーではアトマンの代わりに、あらゆる形態を超越する「不変の本質」の機能としてセイタンが用いられます。

2. セイタンという概念は、キリスト教における魂の概念と同様に、サイエントロジー宗教の基本です。しかしながら、セイタンの概念を魂から区別する必要から、サイエントロジーではセイタンという新しい宗教によりふさわしい新語を造成しました。

この新語は次のふたつの対立する必要性に応じています。1) いかなる言語においても無意味で実存しない言葉を用いることによって、既存の意味論からの束縛を受けずに全く新しい概念をつくり上げる。2) 新語造成において任意性をある程度制限することによって、新語が既存言語に存在しないとはいえ、全く意味をなさないわけではない。つまり、新語造成においては偶発的事項を避ける必要性があったということです。それ自体は何の意味も持たないギリシャ文字のセータが選択されました。それはまたセオス（神）とサイモス（魂）の最初の文字が語源として選ばれており、音声はインド宗教におけるアトマンに似ています。

アトマンとセイタンとの形態論的關係は、前者が後者の語源であることから客観的に判断すると、ハーバードによる概念をインド宗教が予期していたとサイエントロジーでは見なしています。ゆえにサイエントロジーの書籍の中では、「ウーパニシャドにおける永遠不滅の自己（アトマン）はサイエントロジーで言う所のセイタンである」という著述を見付けることができます。

3. サイエントロジーでは自己と宇宙との正しい関係を見出すために自己の内面を見つめることを目的にし、ウーパニシャドの型に倣い、「セイタンが自己についての知識を増していく過程で、セイタン自身を認識し、そうであるという段階とは対照的に、そうなっていくという段階で活動しながら、普遍的原動力（ダイナミックス）に関連する能力が徐々に高まっていきます。」

ダイナミックスは、自己としての個人、セックスと家族、グループ（地域社会から国籍までに至る）、人類、生命体（動植物を含む）、物質宇宙、セイタンという言葉の中に見られる、セータの文字が象徴する精神的宇宙あるいは精神的存在、および至高の存在の8つそれぞれを通した生存への衝動を意味します。

4. セイタンと8つのダイナミックスとの関係の在り方によって、心因性の病気や、倫理的、疑似科学のおよび習慣的結果が生まれます。サイエントロジーによるとその関係は、セイタンが構築する秩序立った現実性へと向けて混乱を減少させていく過程で理解されます。私たちは、それをすべて歴史的な宗教的表現から理解することができ、その中に歴史を超えた価値を歴史的現実性に与えるといった、どの宗教においても典型的な機能を見出します。ここでは前述のように、目的は歴史を超えた「存在」によって、混乱した歴史的な「存在になっていく」こと、つまり、歴史そのもの、個人の歴史、国の歴史、人類の歴史、自然の歴史、超自然的な歴史（宇宙の創造、創造主の行為、創造物に対する創造主による介入）を克服することにあります。これらすべての「歴史」は、自己の認識を失い、自分自身と歴史の位置を定めることができないセイタンを畏に

かけ、破滅させます。しかし、セイトンが自己に対する完全な認識を取り戻すと、すべてにおける秩序が回復し、次のような結果が生まれます。

心因性疾患においては、セイトンは心身の健康を促進し、身体的および精神的活動を最善のものにします。

倫理観においては、セイトンは家族関係や、社会関係、一般的な人間関係を良好にします。

科学的には、セイトンはあらゆる分野の科学および技術的研究を啓発します。また、技術的および科学的生産の他に、芸術や文学の生産にも好意を示します。師としてのハバードは、作家および科学者として秀でており、特に操船術、写真、音楽、鉱物学、農学、通信システムにおいて卓越していました。

この視点から、ウーパニシャドとの対比がいかにも極端な結果に至るかに気付かされます。つまり、宗教が発展していく上での最終産物であるタントリズム（難解な教義）は、時と環境に関連し、私たちが「魔術」と定義する能力を約束します。サイエントロジーでは文芸、科学、技術における能力を約束します。しかし両者ともに、自己の神秘的能力を発見することによって神秘的世界へ介入できることを論じています。

III. 儀式的な実践

1. セイトンについての理論的な論述には儀式の重要性も含まれます。セイトンという概念が、サイエントロジーに独自性を与えていることを考慮すれば、あらゆる条件付きで、セイトンの真の現実的信仰について論じることができます。つまり、典礼制度、宗教サービス、聖職者、象徴などのすべては、セイトンを認識する儀式（後述する「オーディティング」）が根本的であることに比べると付属物と言えます。サイエントロジーは「比較宗教」の傾向を持つとはいえ、これらの「付属物」は単にキリスト教からの借り物だとも考えられます。

これらは実際、ふたつの異なる根源を持つわけではありません。というのも「比較宗教」は単に非ヨーロッパ、あるいはキリスト教以前の、つまり、キリスト教の宗教論題（少なくともハバードが「比較宗教」という用語を用いる上で）以前の文化表現が無意識に変形されたものだからです。神やその他の超人的能力ではなく、セイトン（自己）を強調する東洋的な宗教主題を鑑みると、サイエントロジーの正当性がさらに認められます。また、いずれにしても超人的であるセイトンに付与された「神」の特質、そして、他の（特に東洋の）宗教やキリスト教そのものとの形式적および本質的な類似性によって、事象的にも筋が通っています。

いずれにせよ、サイエントロジーの儀式は、セイトンおよび宇宙との普遍的な関連性を認識することを目的にした実践（特にオーディティング、局部的に教会サービス）に加えて、命名式（洗礼式に代わって）、結婚式、葬式から構成されています。

2. オーディティングは、サイエントロジー宗教のすべてのレベルで実践されていますが、事象的には入会儀式です。それはセイトンについての知識を初めて得る、サイエントロジーの入会儀式です。サイエントロジーにおける主観的見識は、宗教的事象における客観的見識とは異なるとも言えます。事実、サイエントロジーの文献では、オーディティングを儀式というよりは、「聖職者によるカウンセリング」として表現しています。これはキリスト教の精神的カウンセラーの行為（カトリックの懺悔の領域内で）に似ており、司祭による聖礼典とは異なります。というのも、誰もがセイトンとしての自己を知ることができ、またそれを主観的に知り得なければならないからです。その手順は精神分析療法をわずかに彷彿とさせますが、サイエントロジストはそれを禅修行に匹敵するものとしています。

オーディティングの儀式は、一定の継続時間を持つ「セッション」内で行われ、前述のように儀式的です。聖職者は「オーディター」と称され、オーディティングを受ける人は「プリ・クリアー」と称されます。オーディティングに基づいた用語は、入会儀式の意味を大幅に無くしており、それが精神浄化であるにもかかわらず、まるで形式ばらないカウンセリングであるかのようです。入会者の名称である「プリ・クリアー」には、まだクリアーではないがそれを目指しているという意味があります。

入会は古代の神秘的宗教やキリスト教そのもののように段階を踏んで行われ、徐々に理想の姿へと向かいます。キリスト教でも同様に洗礼、堅信礼、聖餐などがキリスト教への入口であり、その堅信礼と聖餐用のパンを口にすることはキリストの聖体拝領を意味します。

プリ・クリアーが初歩の段階からクリアーおよびその先に至るまでのプロセスは解放（「リリース」）として見なされ、このプロセスを行っている個人が「リリース」と称されます。そしてこのプロセスでは、「リリースの各段階」を経てクリアーの状態へと到達します。

クリアーは「聖人」あるいは「聖人の地位」を目指す人のことですが、サイエントロジストはこれを仏教におけるアーハット（尊者）や、涅槃に達したにもかかわらず、俗世間にとどまり他人を救済するボディサトワに匹敵するものとしています。しかしクリアーはまた、「コンピュータ」に類似するものとしても理解されます。つまり、すべてのデータが与えられれば、冷静にどんな問題も解決する能力を獲得しているということです。コンピュータのイメージはサイエントロジーの全著作を通じて使われており、これは「宇宙時代の宗教」として定義付ける所以です。

また、ハバードによって発明された「エレクトロメーター」についても言及しており、これは電子工学によって特徴付けられる近代の典礼器具と見なされます。それは電子測定装置で、プリ・クリアーの精神的苦悩を客観的に探知し、またそれに続くオーディティング・セッション内で、プリ・クリアーが得るリリースの度合いを示します。

- サイエントロジー教会で行われる宗教サービスは、米国内のさまざまなプロテスタントの宗派によって行われているものと大して異なりません。サイエントロジストの体裁には、その内容ほど独自性はありません。サイエントロジーのサービスの中核を成している説教では、教義を押し付けたり、地獄の報いについて人を脅かしたりせず、理性的な解説となっています。ハバードによる公理が教義の代わりとなっており、その唯一の「脅し」はサイエントロジーの原理を適用しないことから起きる「地獄の人生」です。サイエントロジーのサービスには請願祈禱も含まれ、これは超人的な目的地に向けた正式なもので、請願がかなうと信じられています。この行為はサイエントロジーの典礼手引きによって推奨されており、宇宙の創造主に対し、次の事柄について祈ります。1) 「完全なる自由」に到達した際には、すべての人が自己の精神的本質を理解し、宇宙の創造主を知るに至ること（この祈禱は「完全なる自由のための祈り」と称されています）。2) 人権を保護し、すべての人が信仰の自由を享受し、戦争や貧困から解放されること。祈りは「アーメン」で終わり、「神がそうなされますように」と神が明白に名指しされます。
- 結婚式や葬式もサイエントロジーの典礼制度の中でさまざまな形で扱われますが、セيطانについての理論上の必要性から由来しているわけではありません。キリスト教における洗礼に匹敵する、新生児の命名式においてのみ、セيطانと直接に関連する機能がサイエントロジーの文献に著述されています。

この儀礼の原文どおりの弁明では、「命名式の主要な目的は、セيطانがその位置を定めるのを助けることにあります。彼は自分の新しい身体を最近引き受けたばかりです。彼はそれが自分のものであり、自分がそれを操作していることに気付いています。しかし、彼は自分の身体の身元については知りません。彼は多くの成人が自分の周囲に存在していることを知っていますが、その中でも特定のものが、彼が自分自身で自分の身体を自由に扱えるようになるまで、世話をしてくれることを知りません。」つまりそれは、セيطانを自分の身体や両親、名付け親、そして教会員に紹介する儀式です。

- その宗教的特質に合わせて、サイエントロジーでは独特なマークを採用しました。例えば、サイエントロジーの十字架ですが、これは教会の聖職者によって着用され、また教会内に飾られており、見る人にそれが宗教であることを表示しています。

IV.最終的考慮

この報告書は、サイエントロジーが歴史的かつ宗教科学的見地から、あらゆる状況下において宗教と見なされるかどうかの問いに答えることを目的にしています。ここでは「神聖さ」や「終末論」における何らかの欠如、または成文化された倫理観や改心政策について検討しているのではありません。というのも、それらの特質の欠落や存在は、科学的な判断を行う上では役に立たないからです。

宗教学を創設する上で、E. B. タイラーは、「至高の神格または死後の審判」への信念を宗教の定義から除外しました。これに関し、サイエントロジーにおいては安易な省略はありませんが、神学とキリスト教の終末論を実際に超越した宗教構造を教化することが省略されています。

それについては、伝統的な終末論からの明確な逸脱の例が挙げられます。つまり、歴史的な時代や寿命の限界を超えた不滅の存在としてのセイタンの概念を持つてすると、終末論における「終末」についての論議は無意味となるからです。

結論として、何をもってしてサイエントロジーを宗教として見なすことができるかということは、まずは他の宗教との類似性です（これはすでに前述のように確立されています）。さらに、そして特に、西洋における「俗世間」と「宗教性」の違いを考慮すると、サイエントロジーの著述および行為のすべては、それを宗教と見なした場合にのみ理解できます。

よって、サイエントロジーが紛れもない宗教であると明言することで、この報告書はあらゆる司法上の問いに答えることができます。その、救済の要素を持つ理論的内容、歴史を取り去る儀式、予言的な布教活動の衝動ゆえに。そして、市民によって歓迎される国家の公的機関との関係を決定付ける教会組織であるがゆえに。

ダリオ・サバトウッチ
1983年12月12日

